日本ジオパーク再認定審査現地審査報告書

ジオパーク名:四国西予ジオパーク 現地審査員: 橋詰潤,浅野眞希,加賀谷にれ

A. 基本情報

面積	514.8 km²
人口	約 39,000 人
日本ジオパーク認定年	2013 年
前回の審査日程および審査員名	2013/7/24-25 中川・柴田・関谷
ウェブサイト(URL を記載)	http://seiyo-geo.jp/
ソーシャルメディア (すべて列記)	

B. 提出書類一覧

- ・JGC に提出した書類
 - ○四国西予ジオパーク現況報告書
 - ○添付資料 1-1 アクションプラン、1-2 進捗管理表、1-3 サイン整備計画、1-4 ブランディング戦略、1-5 推進計画、1-6 ジオミュージアム基本計画(素案)、2 ジオサイトリストと保全状況、3 教育・普及活動一覧、4 調査・研究実績の一覧、5 ジオツアー一覧、6 ガイド養成活動一覧、7 これまでに作成した案内・解説看板一覧、8-1 ガイドマップ・ガイドブック一覧、8-2 四国西予ジオマップ、8-3 四国西予ジオライド(サイクリングマップ)、8-4 わおマップ(西予市マップ)、8-5 四国西予ジオミュージックブック、9-1GGN,APGN,JGNの会議等への参加状況一覧、9-2協議会としての成果発表一覧、10 国内外のジオパーク間の交流活動一覧

・審査期間中または審査後に直接審査員に提出した書類

- ○ジオパーク関連パンフレット類(ジオミュージック、ジオ×町並みマップ、狩江 段々畑ガイドマップ、地質館見学ワークシート、穴神洞穴遺跡資料)
- ○その他サイト、施設等についての資料(城川地質館パンフレット、卯之町お散歩絵図、愛媛県歴史文化博物館パンフレット、笠置峠古墳周辺マップ、笠置峠古墳のはなし、笠置峠古墳ポストカード、宇和盆地主要遺跡マップ、古代ロマンの里ガイドブック、屋形船利用案内、高川フットパスマップ 01-03)
- ○イベント等についての資料(桂川渓谷ジオツアー、SEA TO SUMMIT 2017、日本地質学会巡検案内書 2017/8、野村の養蚕フィルム上映会)
- ○ジオパーク関連商品(奥地あじ、ジオ土産、ジオパーク切手セット)
- ○西予市、協議会、地域作り団体等の刊行物等(第2次西予市総合計画2016-2024(ダイジェスト版)、広報せいよ2017年5号・8号、H27四国西予ジオパーク教育活動報告書、第2次狩江地域づくり計画2016-2025)
- ○テーマ・ストーリーに関する資料 (ストーリー/キーワード素案)
- ○ジオサイトリスト (ジオパーク遺産、ビューポイント等を含む)
- ○推進状況を示す追加資料(ガイド認定制度、推進協議会名簿、事務局の事務分掌、 出前講座実施一覧、ジオカフェ開催状況、関連施設一覧、名勝・天然記念物一覧、 有形・無形文化遺産一覧、新設ジオミュージアム図面、ジオ学習関連資料、道の駅 どんぶり館における活動状況、四国西予ジオパーク新聞 1・2(愛媛新聞中刷り)、各 種メディア露出資料、ガイドサポート部会関連資料)

C. 地域の地図



D. 前回の指摘事項に関する取組・改善点

前回審査における指摘事項に基づき作成されたアクションプランの各項目について、具体的な施策を定めた「四国西予ジオパーク推進計画」が 2014 年 12 月に策定、事業の推進、管理が行われている。主な指摘内容と改善点は次のとおり。

1)地域全体を表すテーマとストーリーの構築について

四国西予ジオパークの多様性に注視した新たなテーマ「四国山地と宇和海が育んだ海・里・山-4億年の物語」が設定された。このテーマと地域とをつなぐ重要な軸となるストーリーについては、素案が作られ、ガイドとの共有に向けた検討がされていることが確認できた。

2)サイトや施設の見せ方、伝える工夫について

協議会の専門員や、愛媛県総合科学博物館、愛媛県歴史文化博物館、愛媛大学等の専門家の協力に加えて、ジオパークネットワークとの連携を活かしたガイド養成講座が認定後 40 回程度行われている。前回の指摘事項「アラカルト的にならないように」という項目への対応として、2017 年より「ガイドの案内方法」「ジオツアーの造成」など、伝える工夫やツーリズムのあり方等について、全圏域のガイドと一緒に考える講習会が行われ、改善していこうとする意識が伺える。新たに設定されたテーマとストーリーを今後の見せ方の柱に据え、四国西予ジオパークの全域においてガイドの話の連携が一層深まることに期待する。

ジオサイトについて、2016 年以降ユネスコ世界ジオパークのサイト規定に準じたサイトリストの再構築が行われた。これにより各サイトの価値の裏付けや、保全方針の明確化が計られている。保全についてはジオパークの地質・地形を保全が目的の一つとする西予市景観条例が制定・施行(2015)されており、指定地の開墾、土石の採取、鉱物の採掘には届け出が必要と定めるなど積極的な保全が図られている。

3)圏域外のサイトとの連携について

津野町のカルスト学習館を利用した研修会、八幡浜市大島のシュードタキライト(国の天然記念物)について、事務局及び教育委員会レベルでの現地研修、意見交換等が行われており、圏域外の地域との連携が始められていることが確認できた。

4)ガイド窓口やツーリズムの明確化について

認定当時はガイドの受付窓口を各団体及びジオパーク推進室で行っていたが、ガイド団体間の連携強化及び週末の対応等の諸課題解決のため、2016 年度にツーリズムの連携・調整と四国西予ジオパーク活性化を目的に設立された一般社団法人 SGS (西予ジオサービス)に、ジオツアーの窓口代行業務を委託し、ガイド養成、ジオツアーの運営の一部を担当させている。これによりワンストップ窓口が構築されるとともに、担当する職員はツーリズムに対し意識が高く、ジオツアーのコーディネーターとしての役割を果たしている。

5) 拠点施設の展示について

城川の地質館についての「展示内容が専門的過ぎ」「ジオパークのテーマやストーリーとの関係が示されていない」という指摘に対し、よりアクセスの良い城川支所付近に四国西予ジオミュージアム(仮称)の建設を予定し、ジオミュージアム基本計画の策定や敷地、建物平面図による機能の検討が進められている。また、インフォメーション拠点として道の駅どんぶり館に四国西予ジオパークの展示室が新設中である。

6)既存の看板やパンフレットなどの見直しについて

看板などに古い用語があるという指摘に対する対応として、パンフレットの古い用語は見直しが進められている。看板についても準備できたものから順次、新しい看板が整備中であるが、新たなテーマ、ストーリーを反映させた看板について今後の対応に期待したい。古い看板も順次見直しが行われる予定である。

E. ユネスコ世界ジオパーク運営指針基準の検証

E.1 領域

E.1.1 地形地質遺産および保全

四国西予ジオパークの範囲は、リアス海岸が発達する海岸部から、肱川上流に位置する宇和盆地、四国カルストの一部を含む西予市全域を対象としている。現在、本地域では、「四国山地と宇和海が育んだ海・里・山—4億年の物語」を新テーマとして設定。日本列島を形成したプレート運動によって引き起こされた四国山地の隆起や後氷期の海面上昇による宇和海沿岸のリアス海岸化、それにより形成された地質的・地理的多様性、自然と共生してきた多様な人々の生活、生業、文化を楽しむことができる地域である。認定時のテーマは研究発祥の地である黒瀬川構造帯に偏重したものであったが、新たに設定されたテーマは、地域全体を包括したものに改善されている。

四国西予ジオパークでは、ユネスコ世界ジオパークの定義に準じた「サイト等の定義並びにその認定等に関する作業指針」を作成し、認定時は133あったジオサイトを23箇所に大幅に整理した。これによりサイトを保全すべき価値あるものとして明確化し、台帳によって保全状況及び保全活動を管理するとともに、推進協議会の部会再編成に併せて、新たに専門家と市民等で組織する保全部会を立ち上げ、ジオサイトの保全・管理に関する問題検討に当たっている。また新たなサイトの基準には該当しないが、地質・地形学的な現象が認められ、かつ市民等がジオパーク活動として活用する場所を、四国西予ジオパーク遺産として設定している。

2015年度に制定・施行された西予市景観条例では、景観形成に伴う行為等に規定が定められている。特に四国西予ジオパークの地質・地形遺産の保全を図るという観点から指定地における土地の開墾、土石の採取、鉱物の採掘については必ず届出を行うこととされている。また、同条例に基づき個別区域内における具体的な届出行為を定める地区景観計画が策定され、地質資源の保全に努めている。今後も狩浜の段々畑、宇和盆地といった主要なサイトを含めた地区景観計画の策定が予定されている。さらに、本地域のエリア内で鉱業法に基

づく鉱物採掘事業がジオサイト周辺で執り行われる際は、愛媛県を通じてジオパーク推進室 に照会が行われ、マイナスの影響がジオサイト等に及ばないように、考慮した採掘を依頼で きる体制が作られている。

住民レベルの保全活動としては、認定当時から住民や高校生による定期的なジオサイトの 清掃作業が行われている。四国西予ジオガイドネットワークでは、サポート部会によるジオ サイトの安全管理、点検、清掃活動が行われている。また西予市では、ジオサイトの整備・ 補修等に対する補助制度を構築し、このような地域が主体となった保全活動を支援している。

特に重要な地形地質サイト:黒瀬川構造帯

日本列島の成り立ちだけでなく東アジアや地球規模の成り立ちを示す重要な地質帯である。黒瀬川構造帯に関する研究発祥の地が旧黒瀬川村(城川町)であり、四国西予ジオパークはその情報発信に重要な役割を担っている。一方で、これまで城川地質館などでは専門的な展示が一般の理解を妨げてきたことが課題であったが、新設の四国西予ジオミュージアム(仮称)基本計画では「学術的な専門用語を極力省き、子供から大人に渡る幅広い年代の知的好奇心を刺激するような展示を行う」とされており、改善に向けた動きが見られる。(写真:須崎海岸で見られる黒瀬川構造帯)



指摘事項 有 指摘事項:

ジオサイト等の見直しにより「ジオポイント」の名称廃止や、再リストアップが行われている。保全や活用が行われるもののみを選定するなど明確な基準によるサイト再構築は先行的な取り組みで、好ましい事例であるが、新サイトの数が少なく、特に自然(生態系)サイト、文化サイトが少ない。四国西予ジオパーク特徴が多様性であるならば、地質・地形サイトに偏重している現在のリストはバランスが悪いように思われる。現在の四国西予ジオパーク遺産だけでなく、新たな地域資産の取り込みを進め、圏域内の多様なサイトに価値を見出し、各サイトを補強していただきたい。また、サイトの選定を先行して進めたため、各サイ

トの保全方法や来訪者の安全対策などの詳細については検討の途上である。本地域にあった方針、方法の具体化を進めていただきたい。

E.1.2 境界線

四国西予ジオパークは西予市全域がそのエリアであり、パンフレットやマップ、解説看板等 には明確な境界線が示されている。

指摘事項 無

E.1.3 可視性 (ビジビリティ)

四国西予ジオパークでは、ブランディング戦略、サイン整備計画など、明確な広報媒体やサイン、ロゴマークの活用等についての指針があり、地域のデザイナーの協力も受け、広報物等についてデザイン的に高い水準の媒体が多く制作されている。松山空港内には到着ロビー、出発ロビーともに、本地域のデジタルサイネージ情報が公開されており、ジオパーク入り口にあたる道路については6か所に圏域に入ることを示す看板が設置されている。サイトへの誘導看板についても順次設置が進んでいる。大型の誘導看板に示されている現在地標高については、本地域の1,400mの高低差を感じられる良い演出である。地域の子どもがデザインした誘導看板など新規性のある取り組みについても確認した。サイトや拠点施設における本地域全体のテーマを伝える看板についてはまだ数が少ないが、順次整備、更新の計画がある。

指摘事項 有

指摘事項:

今後の看板、パンフレット等には新たなテーマ、ストーリーに基づいた内容を表示し四国 西予ジオパーク全体の魅力が伝わりやすい内容に改善を行っていただきたい。また鉄道を利用する来訪者に対しても、ここがジオパークであることが分かる表示や、マップ・パンフレット等が入手できる方策を検討していただきたい。さらに、既存の公共施設や博物館(相当施設含む)・資料館などについてもジオパーク活動と関連のある施設については本地域のロゴマークを掲示するなど可視性をさらに高めていただきたい。

E.1.4 施設・インフラ整備

博物館としては、城川支所付近に四国西予ジオミュージアム(仮称)の建設を予定し、ジオミュージアム基本計画の策定や敷地、建物平面図による機能の検討が進められている。これまでの収集、展示、教育に加え、体験、集いの機能をもつ施設として機能する予定。施設展示の監修には目代邦康氏があたる。また現在の城川地質館は、収蔵拠点になる予定であり、その収蔵物については適切な管理を図るため、データベース化される計画となっている。

インフォメーション施設としては、道の駅どんぶり館がその役割を担っている。大西康司館長は観光部会の会員でもあり、職員の中でジオパーク活用委員会を設置、ジオパークの見どころへの誘導マップを制作・配布や、ジオミュージックのアイポッドの貸し出し、ジオパークにちなんだ食事メニューの販売など、パートナーとして頼もしい活動を行っている。また、どんぶり館の入り口付近に、現在四国西予ジオパークの独立した展示室を新設中であり、インフォメーション機能の拡充を行っている。

市内には愛媛県立歴史文化博物館があり、文化財関連の事業では専門学芸員大本敬久氏によるサポートを受けている。

指摘事項 有

指摘事項:

新設のジオミュージアムには、学芸員など専門的なスタッフの配置を行っていただきたい。市内には、西予市朝立会館(朝日文楽)、明浜歴史民俗資料館(資料館)、宇和米博物館(資料館)、野村シルク博物館(資料館)、道の駅きなはいや(物産)など、22の関連施設がある。E.1.3の可視性(ビジビリティ)でも指摘したように、地質に特化したものばかりではなく幅広い施設との連携を強化するとともに、ジオパークのロゴを増やすなど可視性を高めていただきたい。また、既存の関連施設との連携や、県立歴史文化博物館ではより幅広い分野の学芸員との連携が進むことなどにも期待したい。

E.1.5 情報、教育、研究

リーフレットの解説については前回の指摘を受け、専門用語を多用しない平明な言葉使い に改善されていることが確認できた。解説看板は順次設置、修正が計画されているところで ある。

市教育委員会として四国西予ジオパークの特色を活かした教育活動を展開していくことを明確に位置づけた西予市教育大綱を 2016 年に定め、これに基づき、市内の小中学校では総合学習のテーマとして本地域を取り上げ、観光客の視点を意識したジオサイトの看板製作やジオガイド技術の習得等のジオパーク学習が展開されている。現在、教育現場の教師自身が主体となったジオパーク学習が行えるように、専用の教材作りを進めている。また、ジオパークを活用した教育について、マイクロバスの手配やジオガイド利用などを予算面から支援する西予市子ども教育振興基金事業の取り組みにも 2016 年度から着手している。

市内小学校では、四国西予ジオパークの大地の特徴を活かした防災と恵みについての学習に取り組み、2015 年度の防災教育チャレンジプランの防災教育優秀賞を受賞した。また、南海トラフ大地震を見据えた防災士の養成カリキュラムに、本地域の大地の特性を学ぶ講座を組み込み、地震のメカニズムと当地の地質・地形における災害リスクの学習機会を設けている。『四国西予ジオパーク教育活動報告書』などにまとめられた教育活動や『ジオパークと地域資源』vol.2 no.1 掲載の蒔田(2016)など、本地域で行われてきた取り組みや蓄積が多くあることが確認できた。

四国西予ジオパークを対象とした学術研究を支援し、地域内の地質遺産に関する科学的価値を明らかにすることを目的に、2014 年度から本地域に関する調査・研究に係る宿泊費について補助をするジオパーク学術研究支援事業を創設している。 また、2015 年度からは愛媛大学学芸員養成課程での博物館実習を受け入れている。

新たな研究成果としては、地質を中心に、生物、歴史分野を含めて論文、学会発表、報告書の発表が27件あり、世界的に稀な三畳系―ジュラ系境界、コノドントの地域間対比、 浅海層石灰岩の産状について発表されている。また黒瀬川帯成り立ちの解明に向けた、日本 地質学会2017 愛媛大会の巡検の受け入れ等がある。

指摘事項 有

指摘事項:

四国西予ジオパークで行われている優れた教育の取り組みがジオパークのネットワークの中で共有されているとはいいがたい部分がある。ネットワークを活用した積極的な情報の発信が必要である。また、各地域の地形・地質に関わる災いと恵みの双方がうまく学習されている例があるが、教員の移動に伴い前年度作成の計画の遂行に支障が生じたり、新たな着任先での取り組みの立ち上げに時間がかかったりするなどの事態も生じている。関係者間のサポートなど、担当者が変わった場合でも持続的な取り組みを可能とするこの地域ならではの方法を考えてほしい。

研究については、新たに整備される予定の拠点施設である四国西予ジオミュージアム (仮称)の計画の中では研究に関する明確な位置付けが確認できなかったので、この拠点施設や

配置される人材を活用した研究のビジョンを作成していただきたい。また、地質以外の研究活動報告が少ない。ぜひ、生態系や文化・歴史分野の研究も盛り上げていただきたい。

看板、ホームページやパンフレットなどでの日本語以外に対応した表示や解説については 対応が十分ではない。

E.2 その他の遺産

E.2.1: 自然遺産

四国西予ジオパークには、国、県、市による多くの名勝・天然記念物の指定があり、また、市内一部が足摺宇和海国立公園に含まれるほか、「四国カルスト」「肱川」「佐多岬半島宇和海」が県立自然公園に指定されている。

指摘事項 有

指摘事項:

(E.1.1 の再掲) ジオサイト等の見直しにより「ジオポイント」の名称廃止や、再リストアップが行われている。保全や活用が行われるもののみを選定するなど明確な基準によるサイト再構築は先行的な取り組みで、好ましい事例であるが、新サイトの数が少なく、特に自然(生態系)サイト、文化サイトが少ない。四国西予ジオパーク特徴が多様性であるならば、地質・地形サイトに偏重している現在のリストはバランスが悪いように思われる。現在、「四国西予ジオパーク遺産」としてリスト化されているものだけでなく、新たな地域資産の取り込みを進め、圏域内の多様なサイトに価値を見出し、各サイトを補強していただきたい。

E.2.2 文化遺産

四国西予ジオパークには、旧開明学校校舎、卯之町伝統的建築物群保存地区等 12 市か所の国指定有形文化財があるほか、多くの県および市の指定する文化財が存在する。また、堂の坂の棚田は、農林水産省によって「日本の棚田百選」に指定されており、地質・地形サイトの狩浜の段々畑では、石灰岩の積まれた段々畑と宇和海の人文景観が評価されたことで、国の重要文化的景観の選定に向けた調査が行われている。

指摘事項 有

指摘事項:

(E.1.1 の再掲) ジオサイト等の見直しにより「ジオポイント」の名称廃止や、再リストアップが行われている。保全や活用が行われるもののみを選定するなど明確な基準によるサイト再構築は先行的な取り組みで、好ましい事例であるが、新サイトの数が少なく、特に自然(生態系)サイト、文化サイトが少ない。四国西予ジオパーク特徴が多様性であるならば、地質・地形サイトに偏重している現在のリストはバランスが悪いように思われる。四国西予ジオパーク遺産だけでなく、新たな地域資産の取り込みを進め、圏域内の多様なサイトに価値を見出し、各サイトを補強していただきたい。

西南四国最古の前方後円墳である笠置峠古墳をはじめ、宇和盆地に点在する古墳群、石灰岩地帯と強く関係して四国西予ジオパーク内に分布が集中する洞穴・岩陰遺跡などについて、ジオツアーの造成に向けた関係機関との連携が行われているが、本地域における重要なサイトであり、ぜひ活用を進めていただきたい。一方で、洞窟内生態系のかく乱などが問題と考えられるため、調査研究を進めるとともに、洞窟内の照度や照光時間などに配慮する必要がある。さらに、先史時代遺跡だけでなく近代化遺産でもある石灰窯群などさらに多くの地域の遺産が総合的に活用してほしい。

E.2.3 無形遺産

四国西予ジオパークにおいては、泉貨紙、窪野の八つ鹿踊り、伊予の茶堂の習俗、城川遊子谷の神仏講の習俗が国の無形文化財、朝日文楽、遊子谷の七鹿踊り、俵津文楽、土居の御田植神事などが県の無形民俗文化財に指定されるほか、市によっても多くの無形民俗文化財が指定されている。

指摘事項 有

指摘事項:

この地域でこれほど多様な、伝統的な祭事、習俗などが育まれた背景には、地域の地形や 気候などの関与が考えられる。無形文化遺産と四国西予ジオパークとのかかわりが感じられ るよう、新たなテーマに基づいたジオパークのストーリー展開による情報提供を行っていた だきたい。教育やツーリズムの中で積極的に紹介することで、ジオパークがこれらの無形遺 産の保護と持続性を支援できるような活動を行っていただきたい。

E.2.4 気候変動および自然災害への関わり

該当なし

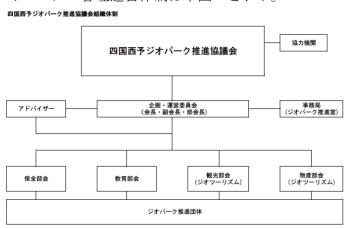
指摘事項 無

E.3 管理運営

四国西予ジオパーク推進協議会は、認定時には行政部会、啓発教育部会、観光部会、市民部会、ビジネス部会に推進協議会の構成団体が所属して活動を進めてきたが、ジオパーク活動をより活性化し、持続可能な体制で運営するために 2016 年に組織改編を行った。各ジオパーク推進団体からの推薦者、ジオパーク活動の推進に意欲的に行動する覚悟のある個人を募集・選出し、保全部会、教育部会、物産部会、観光部会の4部会に再編し、月1回程度の頻度で市民主体の部会活動が展開されている。4 つの各部会は 27 名の部会員からなる。また、ジオパーク推進団体には58の団体・個人が参画している。

意思決定機関としては、各部会長と協議会長(市長)からなる企画・運営委員会で全体の 舵取りを行う。また各関連団体はジオパーク推進団体として参画し、アドバイザーとしては、 愛媛大学の榊原正幸氏、札幌学院大学の小出良幸氏、日本ジオサービス(株)の目代邦康氏、 愛媛県立総合科学博物館の学芸課長井上淳氏、ほか文化財保護審議会、観光協会、商工会、 女性団体などから 11 名、協力機関としては、松山地方気象台、愛媛大学、愛媛県立歴史文 化博物館、愛媛県立総合科学博物館が参画。年度当初には、部会員、ジオパーク推進団体が 出席する総会を開催し、事業報告、事業計画の承認を行っている。関係者が一堂に会する総 会の機会を利用し、ジオパークの最新の動向を共有する学習会等を同時に開催している。

新たな四国西予ジオパークの管理運営体制は下図のとおり。



また、予算の財源としては、西予市が運営経費を補助金として支出しており、推進協議会の予算とは別に、ハード面等の整備費用を市で予算措置されている。ジオパーク関連の決算額は14,797千円(2013)から、26,229千円(2014)、39,375千円(2015)、29,040千円(2016)、69,580千円(2017予算)と増加している。

ジオパーク担当係から職員が外れた後も、これまでと同様にジオパーク推進に必要な知識や経験を活かせられるように、西予市ジオパーク推進アドバイザー制度を創設・任命し、ジオパーク推進室と連携した活動に従事できるようになっている。 現在、事務局体制としては、地域おこし協力隊制度を活用した雇用による専門員等2名を含めた6名で活動しているが、専門員に関しては、3年目以降の推進体制の維持が大きな課題である。

指摘事項 有

指摘事項:

協議会の再編では、構成団体として多くの団体の関与を維持しつつ、当事者意識のある会員からなる部会組織が生まれている。この新体制のもと、住民と協議会が一体的な活動をすすめ、好事例を多く生みだし、日本ジオパークネットワークに共有していただきたい。また、協議会事務局はすべての関係者を結びつける重要な存在であり、数年単位または審査が終わるたびに事務局員体制が入れ替わり、蓄積されたノウハウや人間関係を失う事のないよう、事務局員数の充実と共に、長期的視点で人員配置を行っていただきたい。地球科学やジオパーク活動に関連する分野の専門家でもある専門員に関しては、期限のない継続雇用が実現できるよう、積極的に取り組んでいただきたい。また、多分野にまたがるストーリーを科学的に確認することができる各方面の専門家との持続的な協力体制を構築、支援が受けられると良い。日本ジオパーク認定審査時の指摘事項である四国西予ジオパーク全体をつなぐテーマやストーリーの構築や共有が遅れているように見受けられた。このこと自体は早急に対応が必要な状況でもあるが、こうした機会を利用してより多くのこの地域の関係者、住民が主体的にテーマの共有やストーリの構築などに関り、ジオパークを用いてこの地域全体をどうしていくのか、どのようにしたいのかを考え続けていってほしい。

E.4 重複 (オーバーラッピング)

市内南部宇和島市との境界部分が、足摺宇和海国立公園の飛び地の特別地域(法華津峠)と一部重複する。法華津峠は、四国西予ジオパーク遺産として位置付けられており、宇和島市と境界をまたぐことから2市が連携して定期的なパトロールや清掃活動を続けている。日本ジオパーク認定4周年記念シンポジウムでは、足摺宇和海国立公園を管理する環境省土佐清水自然保護官事務所から自然保護官を招へいし、地域資源の価値の共有と市民を巻き込んだ保全活動に関する講演が行われ、市民の保全・保護意識の醸成が図られている。また、同自然保護事務所とは国立公園等の資源を活用した体験・学習プログラムの検討が進められており、さらなる連携強化が期待される。

指摘事項 無

E.5 教育活動

(E.1.5 再掲) 市教育委員会として四国西予ジオパークの特色を活かした教育活動を展開していくことを明確に位置づけた西予市教育大綱を 2016 年に定め、これに基づいて市内の小中学校における総合的な学習のテーマとして本地域を取り上げ、観光客の視点を意識したジオサイトの看板製作やジオガイド技術の習得等のジオパーク学習が展開されている。現在、教育現場の教師自身が主体となったジオパーク学習が行えるように、専用の教材作りを進めている。また、ジオパークを活用した教育について、マイクロバスの手配やジオガイド利用

などを予算面から支援する西予市子ども教育振興基金事業の取り組みにも **2016** (平成 **29**) 年度から着手している。

(E.1.5 再掲) 市内小学校では、四国西予ジオパークの大地の特徴を活かした防災と恵みについての学習に取り組み、2015(平成 27)年度の防災教育チャレンジプランの防災教育優秀賞を受賞した。また、南海トラフ大地震を見据えた防災士の養成カリキュラムに、本地域の大地の特性を学ぶ講座を組み込み、地震のメカニズムと当地の地質・地形における災害リスクの学習機会を設けている。

指摘事項 有

指摘事項:

『四国西予ジオパーク教育活動報告書』などにまとめられた教育活動や『ジオパークと地域資源』vol.2 no.1 掲載の蒔田(2016)など四国西予ジオパークで行われてきた取り組みや蓄積が多くあることが確認できた。また、災害・恵み両方を学べる良い取組が進んでいる。成果を蓄積・共有することを進めていただき、ネットワークを利用してほかの地域にも発信していただきたい。教育に関する好例が確認できる一方、教員の移動に伴い前年度作成の計画の遂行に支障が生じたり、新たな着任先での取り組みの立ち上げに時間がかかったりするなどの事態も生じている。関係者間のサポートなど、担当者が変わった場合でも持続的な取り組みを可能とするこの地域ならではの方法を考えてほしい。

E.6 ジオツーリズム

2016 年度に SGS (西予ジオサービス) を設立し、ジオパークに関する窓口業務を委託。 土日祝日を含むジオガイドの申込受付を行うことで、ジオツーリズムに関する受入窓口の一 本化が行われた。

ジオガイドの団体としては、各地域住民主体のジオガイド団体が組織されているほか、ジオガイド養成講座の受講者を中心に「四国西予ジオガイドネットワーク」が 2014 年度に結成さて、組織的なガイド活動を開始した。2017 年ジオパークに関する知識やガイド技術について、基準を満たした者を、ジオパーク公認ガイドとして認める制度が導入され、本年度中に認定ガイドが誕生する予定である。認定されるためには、ジオパークの理念や仕組み、四国西予ジオパークについて学ぶ入門講座や接遇研修、救急救命講習の受講、リスクマネジメントやプログラム作成の手法等について学び、最終的には模擬ツアーを実施する。 ガイド料金については、当初は設定した価格が低く、持続的なガイド運営体制のため 2017 年度からは値上げされた新料金が設定された。

指摘事項 有

指摘事項:

早急に、新たなジオパークのテーマとストーリーの素案を全ての地区の関係者と共有し議論を重ねることで、各地区にまつわるストーリーを完成させ、四国西予ジオパークとして一体感のあるガイドツアーを生み出していただきたい。個々のストーリーは、地域の人が違和感なく語れるものでなければならない。ストーリーの完成度を高める手法の一案として、それぞれの地域のガイドが関わるサイトについてのストーリーを理解し、どのような言葉で伝えればよいか、事務局とガイドが共に考えるワークショップやジオカフェの実施が考えられる。このストーリーはサイトに限らず、将来的には地域の景観、農水産物、無形遺産など、様々な事柄に展開して検討していただきたい。

新たなガイド認定制度について、制度設立の趣旨が「ガイドの質を担保する」ためであるならば、多くの認定者を誕生させることに捉われず、少数でも、ガイドに求められる具体的な基準をクリアできた方のみが認定される、厳格な審査を実施していただきたい。また審査

員については、協議会内部で行うのではなく、プロガイドや各方面の専門家等を加えた審査 チームを立ち上げ、信頼の伴う審査を実施していただきたい。

専門用語の多用は、ジオパークのガイドが「してはならないこと」と、徹底する必要がある。JGN ガイドワーキンググループによる「私たちのめざすガイド像 2015in 霧島」を参考に、お客さま目線のガイドのあり方について、研修プログラムの中で共有していただきたい。 穴神鍾乳洞では、洞窟発見のエピソードなど、地域の人だからこそ語れる物語が多くあり、楽しめるツアーが実施されている。洞穴遺跡の存在も物語の幅を大きく広げる良いサイトである。鍾乳洞ツアーは、日常と異なる特別な経験ができるツアーであり、案内の方法によって参加者の印象や満足度はさらに高くなる可能性がある。語り中心のガイドではなく、五感で感じる体験的要素や、疑問や気づきを促すインタープリテーションの手法などを取り入れ、利用者の年齢や興味に合わせて、さまざまな楽しませ方が提供できるツアーをめざしていただきたい。

四国西予ジオパーク内のガイドにはガイドネットワークに加盟しているガイドと、個別の地域をガイドする地域ガイドの両方が存在するが、2016年度に SGS を設立し、ジオパークに関する窓口業務を委託。土日祝日を含むジオガイドの申込受付を行うことで、ジオツーリズムに関する受入窓口の一本化が行われた。今後は、SGS など民間の関与を高め、ツアーのコーディネートが担われることによって、本地域におけるジオツーリズム連携や一体感の醸成にも努めてほしい。

E.7 持続可能な開発

E.7.1 持続可能な開発に関する方針

認定ブランド「四国西予ジオの至宝」制度が 2016 年度からスタートした。①ジオパークと関わるストーリー性、②独自性、③信頼・安全、④市場性・将来性により審査されている。現在「奥地あじ」などが認定されているが、特にストーリー性が重視され審査は厳しく、しっかりブランドづくりを行う姿勢が伺える。認定ロゴマーク、ホームページの PR など、高級感のあるブランドイメージづくりに成功している。この認定ブランド制度は、市内の事業者を中心とした推進協議会の物産部会で検討が重ねられて施行されたボトムアップの事業である。また、ジオサイトをモチーフにした土産物の販売や、海上タクシー事業者の新たな参画など、ジオパークを活用した経済活動は徐々に広がっている。

四国西予ジオミュージックは、四国西予ジオパークのジオサイトのイメージ曲を募集して楽曲を作るプロジェクトであり、2015~2016年の2年間で全国から3,800曲を超える応募があり、最終的に約300曲が選定されたものである。これらは各ジオサイトをイメージする曲であり、スマートフォンを使用して実際にサイトでアクセスして聞けるほか、道の駅どんぶり館ではアイポッドの貸し出しを行っている。市役所や道の駅のBGM、PR動画等の制作物のBGMなどとしても利用されている。

また、自転車で巡るモデルコースやサイト、施設、グルメなどを紹介した「四国西予ジオライド」マップを製作、配布を行うほか、カヤック、自転車、ハイクで海から山頂を目指すスポーツイベント、SEA TO SUMMIT2016、2017 を誘致・実施するなど、サイクルツーリズムの積極的な推進が行われている。SEA TO SUMMIT では開会式とセットで環境シンポジウムやバーチャルジオツアーを行うなど、参加者が競技そのものだけでなく四国西予ジオパークを楽しめるイベントとなっている。

指摘事項 有

指摘事項:

たとえば卯之町タクシーではドライバーがガイド研修を受けており、ジオパーク内のサイトを巡るコースも設定されている。しかし、こうした交通手段を利用したサイト巡りについては可視性が高いとはまだ言えない。ジオパークの HP で紹介するなど連携を高め、様々な

方法による四国西予ジオパークへの訪問者がジオパークをより容易に楽しむことができるよう、特に個人での来訪者にもこの地域の資産を容易に楽しめるように努めていただきたい。

E.7.2 パートナーシップ

(E3 の再掲)四国西予ジオパーク推進協議会は、認定時には行政部会、啓発教育部会、観光部会、市民部会、ビジネス部会に推進協議会の構成団体が所属して活動を進めてきたが、ジオパーク活動をより活性化し、持続可能な体制で運営するために 2016 年に組織改編を行った。各ジオパーク推進団体からの推薦者、ジオパーク活動の推進に意欲的に行動する覚悟のある個人を募集・選出し、保全部会、教育部会、物産部会、観光部会の4部会に再編し、月1回程度の頻度で市民主体の部会活動が展開されている。4 つの各部会には 27 名の部会員からなる。また、ジオパーク推進団体には58の団体・個人が参画している。

指摘事項 無

E.7.3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

西予市では、地域への分権化の取組として、地域の自由な発想により活用することのできる「せいよ地域づくり交付金」による地域支援が実施されているが、この交付金が各地区で住民が主体となるジオパーク活動を支えている。内訳としては、1 億円の予算のうち、6,000 万円が地域づくり団体に当配分されるが、残りの4,000 万円については手あげ方式で、各地区の住民による地域づくり組織が自らの企画をプレゼンテーションし、外部の審査員により審査し配分先を決定する。先進的かつボトムアップ活動の促進に有効な制度であり、ガイド団体の自主研修やガイド用品の購入等にも活用されている。

指摘事項 有

指摘事項:

手あげ方式の補助金などの利用や地域ガイド団体の設立など各地域での自主的かつボトムアップ方式での住民参加が認められた。ただし、その中では特に人口の集中する宇和盆地を中心とした旧宇和町での住民の関心や関与がやや低いように見受けられた。こうした状況は他のジオパークでも見られる状況であるが、四国西予ジオパークでは卯之町の街並みガイドなどすでに本地域でガイド活動を行っている団体も存在する。地形地質と関連する文化や歴史も多く残る地域でもあるので、こうした地域の資産を生かしたジオパーク活動への参加の広がりを期待したい。

E.8 ネットワーク活動

ジオパークネットワーク活動としては秩父帯で繋がる5つのジオパークの共催による『太古の絆〜約2億年前の地層でつながる仲間たち〜』イベントの実施、隠岐ジオパークとのジオガイド交流会、カルスト台地の石灰岩をキーワードに Mine 秋吉台ジオパークと共催し、土佐清水ジオパーク構想、萩ジオパーク構想を含むジオガイド養成講座の開催などが行われてきた。2016年度からはサイエンスアゴラに出展、また日本地質学会2017愛媛大会では四国内のジオパークが連携してブース出展を行っている。

国際連携として、UGGp認定を目指しているインドネシアゴロンタロ州とは、ジオパーク認定以前から愛媛大学を通じて交流、情報交換を行っている。2017年にはゴロンタロ大学の学生9名が四国西予ジオパークを訪れ、また中村専門員がゴロンタロ州を訪問するなど、相互交流が行われている。

指摘事項 有

指摘事項:

秩父帯を通じた共通性を有するジオパークとの連携事業や、Mine 秋吉台ジオパークなどと共通した地域の資産である石灰岩を通した交流を行うことで、日本列島内での四国西予ジオパークの有する共通性と他とは異なる個性の理解が徐々に進んでいる状況が見られた。

四国西予ジオパークで行われている活動にはジオミュージックやジオの至宝、教育活動などに他の地域では見られないあるいは先駆的なものが多くある。ただし、こうした試みがジオパークのネットワークの中で十分に共有されているとはいいがたい。こうした事例を積極的に発信し、他の多くの地域と共有することにも貢献していただきたい。

E.9 地質鉱物資源の販売

地質鉱物資源の取引にジオパークが関与している事例は見られなかった。

指摘事項 無

E.10 防災·安全対策、防災教育、災害対応

(E.1.5 再掲)市内小学校では、四国西予ジオパークの大地の特徴を活かした防災と恵みについての学習に取り組み、2015 (平成 27)年度の防災教育チャレンジプランの防災教育優秀賞を受賞した。また、南海トラフ大地震を見据えた防災士の養成カリキュラムに、本地域の大地の特性を学ぶ講座を組み込み、地震のメカニズムと当地の地質・地形における災害リスクの学習機会を設けている。

指摘事項 有

指摘事項:

西予市の防災活動と四国西予ジオパークの活動は、協力関係という以上に一体となって行われている部分があることが確認できた。今後もこうした活動をより緊密な連携のもとに持続的に行ってほしい。また、卯之町の街歩きなどでは、火災や土石流の多発する地域であることが地名の変更にも関係していることなどが語られている。今後さらにより多くの地域の資産を活用した多角的な視点からの防災への取り組みが深まることを期待したい。

F. 総括

四国西予ジオパークでは、西予ジオサービスの設置によるガイド窓口の一本化、景観条例の制定、クオリティにこだわった認定ブランド(ジオの至宝)、学校教育、地域のデザイナーを登用したブランド戦略の策定、サイクルツーリズムの取組み、四国西予ジオミュージックなど、多くの先進的な取り組みが行われている。2013年のJGN認定後、推進協議会は、行政としての様々な取組み、細かな計画策定に熱心に取り組んできた結果が確認できた。また、ボトムアップを重視した組織の改編、手上げ方式の地域への補助金制度など、住民主体の活動を促進する動きも高く評価できる。

ジオパークを地域全体で推進する柱となるジオパークのテーマとストーリーについて、関係者との共有が進んでいないことが四国西予ジオパークの大きな課題である。「多様性」を特徴とする本地域において、このストーリーが、全域に分散したさまざまなジオパークの見どころを束ねる役割があるが、それが共有できていないため、看板、パンフレット、教育、ツーリズム、ガイド活動など、ジオパークの様々な活動に影響を与えている。

四国西予ジオパークは、日本ジオパーク認定時に地域住民の活動が大きく評価されたように、ジオパークの推進役になる熱心な住民、団体が多く存在する地域である。2004 年に 5 町が合併して誕生した西予市にとって、ジオパークを推進する一つの目的として 5 つの地区

の住民をひとつにまとめる役割が期待されているが、そのためにも、最優先の課題として、 住民と共により分かり易いストーリーをまとめ上げる必要がある。

G. 指摘事項

・提案:グリーンカード

【早急に対応が必要な事項】

1. ジオパークを地域全体で推進する柱となるジオパークのテーマとストーリーについて、関係者との共有が進んでいないことが四国西予ジオパークの最も大きな課題である。「多様性」を特徴とする本地域において、このストーリーが、全域に分散したさまざまなジオパークの見どころを束ねる役割があるが、それが共有できていないため、看板、パンフレット、教育、ツーリズム、ガイド活動など、ジオパークの様々な活動に影響を与えている。早急に事務局が準備した草案を多くの関係者の間で共有し、それをたたき台とした議論を行い、住民とともに本地域ならではのわかりやすいストーリーをまとめ上げる必要がある。

【中長期的な対応が必要なもの】

- 1. ジオサイト等の見直しが行われ、保全や活用が行われるもののみを選定するなど明確な 基準によるサイト再構築は先行的で好ましい事例だが、特に自然(生態系)サイト、文化 サイトが少ない。四国西予ジオパーク特徴が多様性であるならば、地質・地形サイトに偏 重している現在のリストはバランスが悪いように思われる。新たな地域資産の取り込みを 進め、圏域内の多様なサイトに価値を見出し、各サイトを補強していただきたい。また、 サイトの選定を先行して進めたため、各サイトの保全方法や来訪者の安全対策などの詳細 については検討の途上であり方針、方法の具体化が必要である。
- 2. 今後設置、製作する看板、パンフレット等には新たなテーマ、ストーリーに基づいた内容を表示し四国西予ジオパーク全体の魅力が伝わりやすい内容に改善を行っていただきたい。また鉄道を利用する来訪者に対しても、ここがジオパークであることが分かる表示や、マップ・パンフレット等が入手できる方策を検討していただきたい。さらに、既存の公共施設や博物館(相当施設含む)・資料館などについても、地質・地形を紹介する施設だけでなくジオパーク活動と関連のある施設には本地域のロゴマークを掲示するなど可視性をさらに高めていただきたい。
- 3. 研究については、新たに整備される予定の拠点施設である四国西予ジオミュージアム (仮称)の計画の中では研究に関する明確な位置付けが確認できなかったので、この拠点 施設や配置される人材を活用した研究のビジョンを作成していただきたい。また、生態系 や文化に関する研究も積極的に進めていただきたい。看板(一部は対応あり)、ホームページやパンフレットなどでの日本語以外に対応した表示や解説については対応が十分では ない。
- 4. 協議会事務局はすべての関係者を結びつける重要な存在であり、数年単位または審査が終わるたびに事務局員体制が入れ替わり、蓄積されたノウハウや人間関係を失う事のないよう、事務局員数の充実と共に、長期的視点で人員配置を行っていただきたい。地球科学やジオパーク活動に関連する分野の専門家でもある専門員に関しては、期限のない継続雇用が実現できるよう、積極的に取り組んでいただきたい。

- 5. 新たなガイド認定制度について、制度設立の趣旨が「ガイドの質を担保する」ためであるならば、多くの認定者を誕生させることに捉われず、少数でも、ガイドに求められる具体的な基準をクリアできた方のみが認定される、厳格な審査を実施していただきたい。
- 6. 専門用語の多用は、ジオパークのガイドが「してはならないこと」と、徹底する必要がある。語り中心のガイドではなく、五感で感じる体験的要素や、疑問や気づきを促すインタープリテーションの手法などを取り入れ、利用者の年齢や興味に合わせて、さまざまな楽しませ方が提供できるツアーをめざしていただきたい。
- 7. 四国西予ジオパーク内にはガイドネットワークに加盟しているガイドと、個別の地域をガイドする地域ガイドの両方が存在する。SGS (西予ジオサービス) が設立されガイドに関する窓口業務が一本化されたが、今後は、SGS によるツアーやガイドのコーディネートなど民間の関与を高め、ジオツーリズム連携や一体感の醸成にも努めてほしい。

H. 行程表

現地審査視察内容・場所 主な対応者 気づいたこと/コメント

1 月目 (2017/11/14)

8:30 西予市役所

- 概要説明
- · 市長説明 · 意見交換
- · 事務局説明 · 意見交換



(詳細は別添)

管家一夫会長、 、 河野 大会長、 、 京田 、 大田 、

事務局、市長からジオパークを「持続可能なまちづくり。西予のまちを 1 つにする。西予の宝を次の時代につなげる。」ために行うことなどが説明される。

10:30 須崎海岸

海洋丸ジオクルーズ



宇都宮とみこ ガイド部会長 4 億年前の地層の説明や、平坦地が少なく段々畑が広がる景観、各集落が分断された地形によって近接していながら独自性の高い文化が営まれていたこと、須崎海岸での漁業の特徴などの説明。

12:40 みかめ本館

- ・ジオの至宝説明・ 意見交換 (昼食)
- ・住吉丸ジオクルーズ 説明・意見交換



宇都宮美由氏

朝井秀幸氏

現在認定されている唯一のジオの至宝である「奥地あじ」の説明。地形地質との関係やストーリー性が非常に厳密に審査され認定されていることが説明された。また、地域の産品に関わる連携(コメ生産者と漁業者など)が個人レベルで進んでいることも説明された。

15:00 狩浜の段々畑

・段々畑ガイド



中川裕子氏、濱田又 治氏、佐藤文明氏、 沖村梅男氏、川崎昇 来訪者に説明を行うガイドとしてだけでなく、地域の住民(特にみかん生産者)と訪問者の仲立ちとなり軋轢を防ぎ来訪者をスムーズに迎える存在としてもここの地域ガイドは機能している。

16:00 狩江公民館

- ・かりとりもさくの会説明
 - 意見交換



(懇親会)

原田孝二会長 外

四国西予ジオパークのガイドは、この地域だけに必ずしも閉じているわけではなく、ガイドネットワークの講師としても出向するなど先駆的な活動を行う地域の事例を他のガイドにも共有している。

2 月月 (2017/11/15)

8:30 卯之町

・町並み散策



9:00 西予市役所

· 部会説明 · 意見交換

防災教育説明・意見交換

11:20 穴神鍾乳洞

• 鍾乳洞視察



(詳細は別添)

大本敬久学芸員 外

大本学芸員は民俗学の担当。中村専門員 とコラボした街歩きやジオと民俗学に関 する講演なども行っている。防災と街並 みに関するストーリーの一部も聞くこと ができた。

菊地泰三部会長、宇 都宮松夫部会長、田 中徳博部会長、谷本 英樹部会長、山本福 晃氏、近藤直敏氏、 久保田実氏、大西康 司氏

谷川和久課長補佐、 河野哲哉課長補佐、 冨永加奈教諭、西村 隆信教諭 外

恵美須孝一氏、恵美 須明美氏、玉川浩幸 氏

保全についてはサイトの再整理が先行して取り組まれる。具体的な保全方法や安全管理などについてはこれから。

ジオパークと強く結びついて防災行政が取り組まれている。

上下に 2 つの入り口があり、下から入って鍾乳洞の説明を行い、上に移動しながら縄文時代の遺跡の説明を行うスタイル。途中で蝙蝠などの生態の説明も行われる。洞内の照明が明るすぎるなどの改善点も見受けられる。

12:20 川津南高齢者等活動 促進施設 (昼食)

・川津南やっちみる会意見交換



安田司氏、亀岡紀世 美氏、熊谷孝道氏、 福林奏氏、豊岡雄一 郎氏 外 フットパスの設定など先駆的な取り組みがある。

13:50 城川地質館

• 館内紹介



宇都宮知江氏、楠野峰子氏

現状の館内の展示は非常に難解であり、 ガイド付きでも児童・学生の理解は難し いように感じた。

14:40 ジオミュージアム 建設予定地

14:50 こじゃん tea

・野村地域自治振興協議会 意見交換 熊谷琢磨氏、古賀テ ル子氏 野菜作りや宿泊施設等の再生も行っており、グリーンツーリズムとの連携なども期待できる。ジオパーク内のサイトや風景をかたどったお菓子である「ジオ土産」は造形も味も良い。地元産の食材を使用していることをもっとアピールした方が良い。

16:20 西予市役所

・ガイド団体意見交換



長、今西靖志氏、三 好くにこ氏、和氣宗 一郎氏、山本瑤子 氏、久保田ナリ子 氏、立山久恵氏、古 窪義久氏、千田隆之

氏、山中容子氏 外

田中徳博会長、宇都

宮とみ子ガイド部会

SGS (西予ジオサービス) など民間団体 がジオツアー受付窓口としての機能だけ でなく、今後のツーリズムの一体的な運 営への意欲があることが感じられた。

(食事会)

3 月目(2017/11/16)

8:30 西予市役所

事務局ヒアリング



• 審查員意見調整

10:30 西予市役所

•講評 • 意見交換

管家一夫会長 外多数

(詳細は別添)

事務局

12:10 道の駅どんぶり館 (昼食)

• 施設紹介

大西康司館長 外

新たにジオパークのガイダンスコーナー が設置される予定で建物はほぼ完成して いた。

13:10 県立歴史文化博物館

• 施設紹介

藤田享館長、兵頭勲 学芸員、大本敬久学 芸員 兵頭学芸員より展示解説を主とした四国 西予ジオパークの歴史の説明。大本学芸 員からは牛鬼など民俗資料の多様性につ いての説明受ける。本博物館を会場にジ オパークの講演や、愛媛県総合科学博物 館と連携したイベントも開催されてい る。

14:00 笠置峠古墳 ・サイト紹介



髙木邦宏係長 外

宇和盆地や海側の地形を見渡せるビューポイントとしても重要。文化遺産としての活用は既に多くの実績があり、今後はジオパークのツアーとの連携にも期待が持てる。